第一次米国対日教育使節団団長ストッダードの生涯と思想形成

George D. Stoddard (1897－1981, Chairman of U.S. Education Mission to Japan):
His life and formation of his educational ideas

渡辺かよ子 (Kayoko WATANABE)

１．はじめに：生涯と業績の概要

本稿は、今日の日本の大学における「教養教育」をめぐる混乱の歴史性をより広い視野から俯瞰するため、戦後日本の教育改革に決定的影響を与えた第一次米国対日教育使節団団長ジョージ・D・ストッダード（George D. Stoddard, 1897-1981）の団長就任前後までの生涯と思想形成を明らかにしようとするものである。

ストッダードは知能の環境による可塑性を強調する著名な心理学者の一人であり、ペンシルバニア州立カレッジ、パリ大学で学んだ後、米国中西部のアイオワ大学で博士号を取得し、アイオワ大学心理学教育学教授、同大学の児童福祉研究所所長、ニューヨーク州教育長等を歴任している。米国代表として国際連合教育科学文化機関（UNESCO）創設に貢献したこの時期、ストッダードは連合国軍最高司令官マッカーサー（Douglas MacArthur, 1880-1964）の要請により占領政策への助言を行うため第一次米国対日教育使節団団長として 1946 年に来日している。帰国後、イリノイ大学学長として戦後の高等教育の拡大要請に応じる数々の改革に手腕を発揮するものの 1953 年に突如解任され、その後はニューヨーク大学、ロングアイランド大学等で要職を歴任しつつ、多彩な教育改革に関与している。ストッダードの生涯は「20 世紀中頃の自由主義的知識人の行動と態度を象徴し、専門職主義と実証科学の将来性を信じ、さらに自由主義的な彼の同時代人よりも一歩進んで個人は自立した人間になることができると論じた典型的なニューディールの自由主義者であった」[1]とされている。

ストッダードについては、これまで教育使節団団長としての占領教育政策の立案に関する日本教育史の文脈から、その過程に関する詳細な歴史研究の蓄積がなされ[2]、子息によるストッダードの教育哲学の概括も土持によって翻訳されている[3]。さらに教育使節団の論理構造を現代米国思想史に位置づける論究[4]や、大学の公共放送への貢献も明らかにされている[5]。本稿は、こうした貴重な先行研究に学びつつ、これまで殆ど注目されてこなかったストッダード自身の生涯と思想形成について、彼の著作や論文、スピーチ原稿等、イリノイ大学文書館所蔵の史料の分析から明らかにしたい[6]。こうした作業を通じ、戦後日本の教育改革を米国の文脈から逆照射し、日本と米国の教育史の交錯と国際政治、世界の教育史の文脈から今日の日本の「教養教育」の歴史的経緯を俯瞰する端緒としたい。

ストッダードは日本においては、第一次米国対日教育使節団団長としてよく知られているが、自身にとっては一時的な周辺的任務であった。ストッダードは、順不同としながら、自身の最も価値ある業績として以下の項目を掲げている。①イリノイ大学学長（1946 年～1953 年）、②ニューヨーク州教育長（1942 年～1946 年）、③アイオワ大学児童福祉研究所所長（1928 年～1942 年）、④NSSE 年鑑『知能：生得性と獲得性』編集（1940 年）、⑤『知能の意味』出版（1943 年）、⑥アイオワ大学大学院長（1936 年～1941 年）、⑦ニューヨーク大学セルフ・スタディ（1956 年）、⑧ニューヨーク大学の副学長・学監（1960 年～1964 年）、⑨UNESCO の活動（1945 年～1951 年）、⑩『*Krebiozen*：偉大なる癌神話』出版（1955 年）、⑪*The Dual Progress Plan: A New Philosophy and Progress in Elementary Education*（1961 年）、⑫全米教育テレビに関する活動、⑬ニューヨークのリンカーン芸術センター委員、⑭コネチカット州ストラッドフォードのアメリカ・シェークスピア祭劇場アカデミー理事、⑮ランド研究所理事、⑯対日米国教育使節団団長、⑰国際的教育活動：韓国、イラン、ケンブリッジ大学、東アフリカ大学、⑱ロングアイランド大学の管理運営（1967 年～1969）[7]。

これらの業績は相互に関連し影響を及ぼし合っており、特に⑯対日米国教育使節団の任務と時期的に重なり直接関連しているのは、②ニューヨーク州教育長としての業績と⑨UNESCO の活動である。1940 年代前半の戦時下のニューヨーク州教育長として、ストッダードは州内の教育機関の集権化と戦時対応、そして戦後の高等教育の拡大と復員兵や社会人の受け入れに向けた必要な方途を構想し、平和の実現に向けた国内外の教育の重要性を鑑み、米国代表の一人として UNESCO 設立に取り組んでいた。戦時対応と戦後の教育による世界平和の構想という文脈の中で、ストッダートは対日米国教育使節団団長として日本の戦後教育改革に提言を行い、その国際的な教育助言活動は、韓国、イラン、東アフリカ地域にも及んでいる。

２．誕生から青年期

ストッダードは、1897 年にペンシルバニア州北部に位置する炭鉱の町カルボンデールで保険業を営む父母のもとに生まれた。父方は１７世紀にコネチカットに移住してきたイギリス系移民、母方は北アイルランドからバージニア、さらにペンシルバニアに移住したスコットランド系の移民である。家族構成は、父母と二人の兄と姉、弟に加え、ナポレオン時代から第一次世界大戦に至る時代を生きた父方の祖父が同居していた。

理数系科目に特に秀で地元の高校を僅差の二位の成績で卒業したストッダードは、1 年間地元の銀行で働いた後、ペンシルバニア州立カレッジに入学している。カレッジ進学率が 10%程度であった当時、文系理系も含め進路が定まらないストッダードに進学に目を向けさせたのは、高校のドイツ語教師であった。ペンシルバニア州立カレッジへ進学した理由は、化学工学を学べ、学費が最も安価なことであった。しかしながらカレッジでの 2 年間の数学や物理、化学を中心とする工学の基礎教育は詰め込み式

で、語学や文学、社会科学を学ぶ機会を欠き、ストッダードは自らが求めるよき人生との違和感を持った。1918年春からの数か月の軍隊経験を経て、翌1919年にカレッジに復学したストッダードは教育学を主専攻、心理学を副専攻として工学から転向し、それまでの2年間のリベラル・アーツでの遅れを取り戻そうと猛然と勉学に励んだ[8]。ストッダードは、後年、自らのキャリア上の重要決断は、①カレッジ進学、②工学から教育への転向、③心理学への移行、にあったと述べている[9]。

ストッダードのカレッジ生活について特筆されることは、よき教師フレッド・バウク博士（O.Fred Boucke, 1881-1935）との出会いである。バウク博士の経歴等は不詳であるが、ストッダードが学んだ1920年前後に40歳の博士は当時、『社会主義の限界』（1920）や『経済学の発展 1750-1900』（1921）、『経済学への批判：教条ならびに方法論的に』等を出版し、積極的に研究成果を世に問うている[10]。ストッダードはバウク博士について以下のように述べている。

「…私の情熱は、学問がその人の興味を満たすのみならず生き方をも特徴づける生きた人間によって覚醒された。ペンシルバニア州立カレッジの一人の教授であるフレッド・バウク博士が、この神秘的な情熱注入を具現していた。ドイツの学問的伝統の下、バウク先生は経済学と社会学を深く理解していたが、先生はそれに止まらなかった。先生はルソーにリカルド、コント、ミル父子、マルクスを越え、疑わしくとも、世界の民主主義の指導者がそこから集める事柄を発見するための優れた試みにも目を開いていた。先生が述べられた目的は、その欠陥や危険、限界を分析することによって政府の民主的形態を強化することであった。我々学生はバウク先生が主任教育者（master teacher）として最良であることを知っていた。先生は学問と想像、聴衆を引き付ける演出を兼ね備えていた。先生が我々の授業レポートや期末レポートを一行一行丁寧に読んでくださっていたことは、余白に記されたコメントが証明していた。先生の注釈は私にとって特に価値ある大切なものであった。先生は学生である私のレポートを単に『採点する』のみならず、批評してくださった。」[11]

授業や授業後の語らい等バウク博士と親しく交流したストッダードは、その著作から長期にわたる影響を受けている。署名入りで贈呈された『社会主義の限界』（1920）を卒業後50年以上たっても大切に保管し、別の著作のゲラ刷り段階で意見を求められたことも懐かしい記憶となっている。バウク博士はストッダードに、経済学に進むのであれば3年間の博士課程を終えるまで無利子で学資援助することを申し出ているが、ストッダードは熟慮するもその申し出を断っている。ウィリアム・ジェイムズ、デューイ、ビネー、ソーンダイク、ワトソン、ウッドワース等の著作に魅了されていたストッダードは進路を心理学と決めていたからである[12]。

ストッダードは当時の自身のカレッジ生活について次のように述べている。「全てにおいてペンシルバニア州立カレッジは私によきものであった。その多くの教授は以来私が知ったどの大学においてよりも優れていた。カレッジの雰囲気は健全で創造的で

あった。中央ペンシルバニアの丘陵の内部に位置し、冬には雪に閉じ込められる州立カレッジの小さな町は、州の全ての地域から同様に遠かった。大都市の誘惑を欠いた、ラジオやテレビ、スポーツカーでのドライブがまだない時代にあって、カレッジ・コミュニティはそれ自身の資源を開発しなければならなかった。1918 年当時、『カレッジ精神』は重要な概念であり、私が名誉ある言明を受けた全学コンテストの題目であった。私の定義は、学生新聞の黄色の第一面に表示されたように、『カレッジ精神とは、その社交的、道徳的、宗教的生活の発達において高邁な理念を促進する、全ての活動における学生団体の熱心な協働である。』というものであった。私のディベイトのコーチは審判員の一人でもあり、後日、『メンタル』という言葉を入れなかったことが不運であった』と述べた。1970 年代、学生のメンタル生活に生涯を奉げてきた後になって、もし私がその定義を改めて述べるとすると、今回は宗教という言葉を省略することで再び咎められるであろう。」[13]

1921 年にカレッジ卒業後、進学のための学資準備のため、ストッダードはカルボンデールの地元の高校で 1 年間、教員を勤めている。3 年生の英語の授業を一日 5 コマ週 5 日担当し、毎日無給の 2 時間のカウンセリングと課外活動の監督も行っている。生徒の作文を毎日持ち帰って訂正指導し、金曜日には教科書を離れた時事的教材を用いた。カルボンデールの高校で必修とされていた英語教材にはミルトンの詩、ジョージ・エリオット、ウォルター・スコットがあったが、ストッダードは校長から提示された必修教材を全て教えるという条件の下、当時、ストライキや暴徒、流血事件を見聞きしていた生徒向けの教材としてシェークスピアの『マクベス』を取り上げ、上演している[14]。

３．大学院での研究と就職（パリ大学とアイオワ大学）

１）パリ大学への留学

ストッダードは、1922 年から翌年にかけて私費留学生としてパリ大学ソルボンヌ心理学研究所で学んでいる。当時米国の多くの大学教授がドイツに留学し博士号を取得していたが、第一次世界大戦のドイツは米国学生にとって不評であり、ストッダードは留学先をフランスにした。まずはグルノーブル大学のアリアンセ・フランセーズでフランス語を集中的に学んだ後、ストッダードはフランス人やフランス植民地出身の学生等と共にソルボンヌで学んでいる。ソルボンヌでのストッダードの師は、ビネー（Alfred Binet, 1857-1911）との共同研究で個別式知能検査法であるビネー・シモン検査を開発したセオドア・シモン（Theodore Simon,1872-1961）であった。学位取得の必修科目にはシモンの心理テストに加え、ドラクロワ（Henri Delacroix, 1873-1937）の言語と思考、デュマ（Georges Dumas, 1866-1946）の異常心理学、ジャネ（Pierre Janet, 1859-1947）の記憶、ピエロン（Henri Pieron, 1881-1964）の認知、ワロン（Henri Wallon, 1879-1962）の教育心理学等が含まれていた。ストッダードはソルボンヌで学ぶ傍ら、コレージュ・ド・フランスに出かけて講義を聴講し、シモン教授が引率する

パリやその近郊の精神病院や特殊学校での実習旅行にも参加している[15]。

ストッダードによれば、シモン教授は知能指数やIQという言葉をけっして使用しなかった。子どもの心理状態を幾か月遅れているか、あるいは進んでいるかというように考え、その後のような固定性への疑念をさけるように教えられていたという。知能研究に興味をもったストッダードは、シモン教授から親しく指導を受け、1911年の逝去後もその論文がそのままになっていたビネーの生理心理学研究所に自由に出入りしていた。ソルボンヌでは学期末に厳格な試験がなされ、幾人も落第していく中でストッダードは生き残り、1923年に米国の修士号に相当するdiprome学位を取得している[16]。

学業に加え、ストッダードは芸術の都パリでの生活を享受し、後年のキャリアに活かされる多くの経験を積んでいた。ストッダードは多くの著名な芸術家と知り合い、米国の外交機関や篤志家から学生に与えられる無料入場券でオペラやコンサート、舞踏等の劇場芸術を存分に楽しみ、教会や城等の観光や美術館等にも頻繁に出かけている。復活祭休暇には友人と鉄道でイタリア旅行に出かけ、このパリ留学時代にその後も継続する友情を育んでいる[17]。

2）アイオワ大学での学位取得と就職

1923年に帰国したストッダードは、米国中西部のアイオワ大学大学院で心理学を主専攻、教育学を副専攻として博士課程での研究を開始し、夏季講座の単位もフル活用して僅か2年後の1925年には博士号を取得している。ストッダードの博士論文は、「アイオワ・プレースメント・テスト」と題され、カレッジ入学前に習得した知識に基づき、特定の科目への特定の適性を構成することによってその後の成功をより正確に予想した。博士号取得後にストッダードは同大学の心理学と教育学の助手に採用され、助教授、准教授、教授として知能や学力、適性に関する多数の論文を発表している。1928年には後世に多大な影響を与えた生徒の学力を測定するアイオワ・プレースメント・テストを共同開発し、1929年には後述の児童福祉研究所の所長に就任している。

アイオワ大学の心理学研究は、1887年に米国で7番目に開設された心理学実験室から始まっている。ストッダードが博士課程学生として学び、新進気鋭の研究者として活躍したのは、スタンレー・ホールに指導を受けた哲学者パトリック（George T. Patrick, 1857-1949）による心理学実験室の創設（＝第一期）の後、シーショア（Carl Seashore, 1866-1949)が厳密な実験方法による実証主義的心理学を確立し指導にあたった第二期にあたる。アイオワ大学の心理学の伝統は、実験心理学と応用心理学の相互に有益な関係性にあり、実験研究と総合的理論の統合、心理学の方法論的基礎に常に関心が向けられていた。同校は全米屈指の心理学博士を生み出す研究大学であった[18]。1917年には児童福祉研究所（Iowa Child Welfare Research Station）がCora Hillisの粘り強い努力と市民の協力によって北米初の子どもに関する科学研究機関として州立大学の付属機関として設立されている[19]。

心理学者ストッダードの研究業績として最も注目され、その論争が今日まで継続しているのが、知能の生得性と獲得性の問題である。それは 1940 年の National Society for the Study of Education の年鑑に焦点化されたストッダード率いる知能の変容と獲得性を重視するアイオワ学派と、ターマン（Lewis M. Terman, 1877-1956）率いる知能の生得性を強調するスタンフォード学派との間で厳しい批判と反批判が繰り返された論争であった。ストッダードによれば、ビネーとシモンによって開発された知能検査を、スタンフォード学派の知能検査は抽象思考のみに矮小化して改訂しているという。同僚ウェルマン（Beth Wellman,1895-1952）による幼児の IQ の変容の実証研究に加え、パリ大学でシモンから親しく薫陶を受けビネーの研究資料を直接精査していたストッダードにとって、こうした知能の概念そのものの矮小化はその師シモン同様、看過できないものであった。

４．ニューヨーク州教育長からイリノイ大学学長へ

１）ニューヨーク州教育長

ストッダードは戦時下の 1942 年に住み慣れたアイオワを後にし、ニューヨーク州教育長に就任している。「それは難しい決断であった。アイオワ大学はアメリカが世界大戦に入っている見通しに直面し不安な状況に陥っていた。その教員や学生団体への影響は粉砕されるようなものであった。そしてそれは 1941 年 12 月の真珠湾に続いて現実となった。ニューヨークの全ての教育資源を戦時動員する機会は、アイオワでの見通しよりも大きなものに見えた。そのような高度な考慮とは別に、単刀直入に言えば、私は知能に関する National Society の 1940 年の年鑑の出版によって、私のアイオワでの仕事は一種の頂点に達したと感じた。私は学問世界の職業的危機である『同じようなもの』の考えに囚われていなかった。／1941 年から 1942 年にかけての劇的な出来事が、私のオルバニーからの申し出に関する直感的感覚を確認した。教育は一変した。技術的科目と戦争関連の研究が普及した。身体的条件が適った男子の学部学生は入隊した。（自身が就任した：筆者）法人統一体としてのニューヨーク州の大学は失う学生団体が存在しなかった。」[20]。

ニューヨーク州にあっては、教育長は州の大学を含む公立学校教育制度全般と図書館や博物館等の社会教育施設を統括していた。教育を民主主義の武器と捉える戦時下の教育長ストッダードは、懸命に州内の教育機関の集権化と戦時対応に努め、人々に自由と民主主義の勝利に向けて戦い抜くことを呼びかけている。徴兵検査で 40%以上の青年が身体的問題によって不合格となり、その 3 分の 1 が栄養失調であるという当時の青少年の心身の健康問題を憂慮しつつ、戦中のこの時期から戦後の高等教育の拡大と心身共に傷ついた無職の復員兵や社会人の受け入れに必要な準備を整えている[21]。

他州や他国の事例と共に、公共政策としての高等教育の在り方を精査しつつ[22]、新たな時代の要請に応じる高等教育として 2 年制の職業主義と素人主義との間の中道を目指す tertiary education を構想し[23]、公立学校の教員の資質向上と昇給に努めた。戦

後の徴兵制の義務化についてストッダードは、必要とされる軍事スキルそのものが固定的概念ではないとし、重要なことは青少年が健全でよく教育された教養ある人間であり続けることであると述べている[24]。

当時の自らの教育長就任演説の文書を 30 年後に読み返したストッダードは、その気取った狂信的な論調に驚き、それは真珠湾の惨事に続く米国人の極度に深刻な雰囲気にあってのみ判断され、おそらく許容されうるものであろうと述べている[25]。

2）国連教育科学文化機関（UNESCO）

こうした中、ストッダードは、米国代表の一人として教育科学文化による平和の実現に向けた国連教育科学文化機関(UNESCO)創設に寄与している。1942 年の戦後教育復興に向けた連合国の文部大臣会議を受け、1945 年 11 月に UNESCO 憲章が著名され、翌年第一回総会がパリで開催されている。UNESCO 創設にあたっては、米国内でも国内法との関係で、外交と教育の関係をどう捉えるのか、その目的（国家主義と国際主義の相克）、主体（国家官僚か研究者や学生等の個人か）、方法（新旧メディアの強調）が様々に議論された[26]。

ストッダードが 1945 年の UNESCO の創設にむけた米国代表となったのは国務副長官ベントン（William Benton, 1900-1973）の推薦によるものであった。米国代表は名目的にはベントンであったが、実質的代表として指導性を発揮したのが、詩人・司書・外交家として著名なマクライシュ（Archibald MacLeish, 1892-1982）であり、国際文化交流の手法と共に、性格的に根深い摩擦があった両者を仲介するためにストッダードが任命されたという[27]。

この時期既にストッダードは平和に向けた教育の意義を繰り返し説いていた。例えば 1945 年 1 月には「世界平和に向けて米国を教育する」と題されたラジオ番組で教育を民主主義の武器と捉え、教育の主要機能は学校内外で平和の構造に向けた偉大なる希望を存続させることにあると述べ、そのための具体的課題を論究している[28]。UNESCO 設立の直後からその理念の普及に向けた多くの論稿を記している。「新しい組織の全体的目的は平和に向けて貢献することにある。人の生活様式や国民集団の文化的切望に対する無知は、不安や恐怖の発展の一つの要因であると言われている。一つの国家の内部においては、無知や偏見や憎悪に基づく指導性を可能にする。ヨーロッパのファシストやナチの政府が明白な事例である。」[29] 「UNESCO の主な目的は平和に向けた貢献をなすことである。教育と科学、文化は共に、侵略を低減させ人間と国家の平和を愛する習慣を強化するための強力な提示のために一致団結しなければならない。」[30]

3）対日教育使節団団長

こうした状況にあって、ストッダードは第一次米国対日教育使節団団長として 1946 年に日本を訪れ、民主化に向けた教育改革のための助言を行い、当時のストッダードの言動と改革の経緯は既に先行研究で明らかにされている[31]。ストッダードは、帰国後、

ニューヨークの教員向け講演会で、日本での経験を次のように語っている。

「マッカーサー元帥に要請された 27 人の教育家が、日本の教育を研究するために任命された軍教育家委員会と日本の教育家集団と協働し、天皇にも謁見した。天皇と面談した集団に女性が含まれていたのは初めてであった。その際、天皇がストッダードに皇太子に英語を教えるアメリカ人女性の家庭教師を見つけるよう要請した。／使節団は日本の教育の地方分権化、文部省からの権威剥奪、地域コミュニティの学校に責任をもつ地方委員会を設置することを勧告した。それは日本の再建の基礎となる職業教育のプログラムや、学齢期以外の人々の態度変容に必要不可欠な成人教育、新しい必要に見合う教育課程の改訂、そしてより自由主義的な高等教育（more liberal higher education）を力説した。／最も議論を呼んだ勧告は漢字の廃止と字母のローマ字化、あるいは発音に即した字母の開発である。日本の教育において言葉の障害は深刻なものであった。／使節団報告書はマッカーサー元帥によって『民主主義の伝統にあって高邁な理想が記された文書』として特徴づけられている。勧告の多くは実現に年月が必要であろうが、日本人に『世界平和の促進と基本的人権の尊重に捧げられた諸国家の一員になるのに不可欠な基礎知識における完璧な基礎づけを装備する学びの制度』を提供するであろう。」[32]

4）イリノイ大学学長へ

ストッダードは日本からの帰国後の 1946 年 7 月にはイリノイ大学学長に就任している。当時、州の高等教育関連予算は第一次世界大戦前の 14%から第二次世界大戦前の 3%に減額され、大変厳しい管理運営を余儀なくされていた。その一方で、1944 年の GI ビルの成立によって高等教育の進学者が倍増し、各地の大学はその対応に追われていた。イリノイ大学でも学生数が倍増し、1947 年には 1.2 万人の復員兵が入学し、3 千人が既婚者で 1200 人が子持ちであった。こうした前代未聞の新たな事態に、学長ストッダードは教員スタッフを倍増すると共に給与を大幅に（24%）増額すると共に、シカゴ地区に新キャンパスを造成し、教員と既婚者学生向けの安価な規格組み立て式住宅を建設した。こうして、従来の大学や高等教育が中上流階級の要塞であるという考えを粉砕した[33]。

ストッダードはスピーチ診療所、政府公共事業研究所、経営管理サービスを次々に開設し、さらにはコミュニケーション学の祖シュラム（Wilbur L.Schramm, 1907-1987）を招聘してコミュニケーション研究所を創設している。資産家アラトンより 5600 エーカーの土地の寄付を受け大学施設として活用すると共に、大学図書館の蔵書も 250 万冊に達し全米 3 位の蔵書数を誇る研究大学となっている。それまでのパリやアイオワ、ニューヨークでの経験を活かし、1948 年には大学キャンパスでの第 1 回現代アート祭を開催している。さらに、労働産業問題研究所、獣医学研究所を開設し、それぞれが大学の学部大学院として地域コミュニティの必要に対応する教育研究活動を展開している[34]。

６．おわりに

以上、戦後日本の教育改革に決定的影響を与えた第一次米国対日教育使節団団長ストッダードの団長就任前後までの生涯と思想形成を分析してきた。ここで明らかになったのは、まず、ストッダードが高校とカレッジの前半で大いに自らの適性に迷った上で心理学を専攻し、カレッジで自らの理想の体現と見なす教授に出会っていることである。その後、パリ大学とアイオワ大学で厳密な実証科学の研究手法を学んだストッダードは、知能や学力に関する研究成果を発表する中で、知能は生得性よりも環境や教育による後天性の方が重要であることを確信した。ストッダードは戦時下にあって州全体の教育資源を管理運営する教育長として戦後の帰還兵を迎え入れ等の高等教育の大衆化に向けて準備をしていた中で、UNESCO 活動に象徴されるような国際的活動の一環として対日米国教育使節団団長として来日し、戦後日本の民主化に向けた教育改革に大きな影響を及ぼすことになった。

以上のような過程で形成されてきたストッダードの教育思想はどのような構造と特徴をもっていたのか、ストッダードが日本の戦後の教育改革について勧告する more liberal higher education とは具体的に何を意味していたのか、ストッダード自身はどのような施策をもって戦後の高等教育の大衆化や教員養成に対応したのか、今後の課題として探求していきたい。

---

[1] Cravens,H., Stoddard, George Dismore, *American National Biography*, vol. 20, Oxford University Press, 1999, pp.818-820. 尚、以下の注で文献末尾に付した Box 番号は、イリノイ大学文書館所蔵 George D. Stoddard Papers (1915-2001)の資料番号である。

[2] 海後宗臣・寺崎昌男『大学教育』(戦後日本の教育改革９) 東京大学出版会 1969 年。太田堯編著『戦後日本教育史』岩波書店 1978 年。鈴木英一『日本占領と教育改革』勁草書房 1983 年。久保義三『対日占領政策と戦後教育改革』三省堂 1984 年。鈴木英一他「米国教育使節団報告書の成立事情に関する総合的研究」『名古屋大学教育学部紀要』(教育学科) 31、1984 年。佐藤秀夫他『米国対日教育使節団に関する総合的研究』(戦後教育改革資料 10) 国立教育研究所 1991 年。土持ゲーリー法一『米国教育使節団の研究』玉川大学出版部 1991 年。等。

[3] フィリップ・H・ストッダード「第一次米国対日教育使節団団長ジョージ・D・ストッダードの教育哲学」(土持法一訳)『国立教育研究所研究集録』18、1989 年。

[4] 毛利陽太郎「対日教育使節団員の論理：ストッダード、G.D.の論理構造（１)」『山梨大学教育学部研究報告』29、1978 年、同「対日教育使節団員の論理Ⅱ：ストッダード、G.D.の論理構造（２)」『山梨大学教育学部研究報告』30、1979 年、同「ストッダード、G.D.の知能観の形成過程Ⅰ（1920－1940)」『山梨大学教育学部研究報告』42、1991 年。フィリップ・H・ストッダード「第一次米国対日教育使節団団長ジョージ・D・ストッダードの教育哲学」『国立教育研究所研究集録』18、1989 年。

[5] 赤堀正宜「アメリカにおける公共放送の成立と大学の役割：イリノイ大学公共放送 TV 局と学長 G.ストッダードの場合」『放送教育開発センター研究紀要』15、1997 年、等。

[6] 本稿の一部は「旧制高等学校の廃止と米国教育使節団団長ストッダードの教育観」2014 年 8 月 30 日、松本市教育委員会（旧制高等学校記念館）・旧制高等学校記念館

友の会主催、旧制高等学校記念館第 19 回夏季教育セミナー（於：松本市あがたの森文化会館）、ならびに「G.D.ストッダードの教育思想に関する考察」2014 年 10 月 4 日、教育史学会第 58 回大会（於：日本大学文理学部）で口頭発表を行っている。本稿は平成 26 年度愛知淑徳大学研究助成特定課題研究「旧制高等学校の廃止と一般教育の導入の経緯に関する研究」の成果の一部である。

[7] Stoddard,G.D., *Leaders in American Education 1971, Seventieth Yearbook of the National Society for the Study of Education,* 1971, pp. 335-336.

[8] Stoddard,G.D.、*Pursuit of Education: an Autobiography*, Vantage Press, 1981, pp. 21-22.

[9] Stoddard, 1971, op.cit., p. 323.

[10] O. Fred Boucke (http://www.digplanet.com/wiki/O._Fred_Boucke)を参照。

[11] Stoddard, 1981, op.cit., p.22.

[12] Ibid., pp. 22-23.

[13] Ibid., pp.23-24.

[14] Ibid., pp. 26-27.

[15] Ibid., pp. 30-33.

[16] Ibid., pp. 33-36.

[17] Ibid., pp. 34-35.

[18] Kendler, H. H., The Iowa Tradition, in Cantor, J, H., *Psychology at Iowa: Centennial Essays*, Lawrence Erlbaum Associate, 1991, pp.1-4, 8, Hilgard, E.R., Psychology at Iowa Before McGeoch and Spence, in Ibid., pp. 42-45.

[19] Stoddard, 1981, op.cit., pp.41-45.

[20] Ibid., p.68.

[21] Stoddard, G. D., Youth in Wartime, Alfred University, May 10, 1943. (Box.8-23)

[22] Stoddard, G. D., Meeting Postwar Educational Needs Through State-wide Educational Plannnig, *Annals of American Academy of Political and Social Science*, January 1944. (Box.9-41)

[23] Stoddard, G. D., *Tertiary Education*, Harvard University Press, 1944.

[24] Stoddard, G. D., No Easy Answer, Shall We Have Compulsory Military Training After the War ?, August 3, 1944. (Box.9-59)

[25] Stoddard, 1981, op.cit., p.70.

[26] Ninkovich, F., *The Diplomacy of Ideas: U.S. Foreign Policy and Cultural Relations 1938-1950*, Cambridge University Press, 1981, pp. 61-138.

[27] Stoddard, 1981, op.cit., p.178.

[28] Stoddard G. D., and Nizer, L., Educating the United States for World Peace, Queens College Forum, Winning the Peace, January 2, 1945. (Box.10-78)

[29] Stoddard, G. D., Education and World Order, *Foreign Policy Association*, Albany, December 5, 1945. (Box.10-103)

[30] Stoddard, G. D., UNESCO, *The New Pepublic*, January 7, 1946, p. 18. (Box.10-104)

[31] 注 2 を参照。

[32] *New York State Education*, June 1946, pp. 679-680. (Box.23-1)

[33] A Brief History of the University of Illinois, University Archives, University of Illinois at Urbana-Champaign (http://archives.library..illinois.edu/reasuters/history.php)

[34] Office of the University President, Stoddard 1946-1953, University of Illinois (http://www.uillinois.edu/cms/one.aspx?portalId)